

台湾の前途

● 放眼日中 ●

5月20日、台湾の新しい総統、蔡英文氏が就任演説をしているちょうどその日に、中部の埔里という小さな街にいた。ここは、ロングステイの受け入れ地として日本でも一時話題になった環境の良いところ。日月潭という観光地に近く、梨山など高山の玄関口である。新総統とは全く関係のない「お茶の旅」の途中だったのだが、偶然入った脚マッサージュ店は大陸からのお客でいっぱいだった。テレビでは日本のアニメ「ちびまる子ちゃん」が流れていたが、大陸客が帰ると同時にオーナーはニュースチャンネルに切り替え、蔡氏の演説に聞き入っていた。

脚をマッサージュしてくれた目の不自由な若い男性に新総統について聞くと、彼は即座に「彼女には何の期待もしていない。彼女はまだ何もしていないので、何の評価もできない。

実際、台湾に貢献する行動をした人間だけを私は支持したい」と実に力強く言い切ったので、かなり驚いてしまった。隣の男性が補足するには「前総統への期待が大き過ぎたので、今は誰が何を言っても信じられない」のだという。これは、新総統にとつて相当に厳しい船出であると言わざるを得ない。

中国大陸と距離を置く新政権にとつて、経済政策は最も重要な課題だろう。「6月から中国の観光客が来なくなる」という噂も駆け巡っていた。正直、大陸の、特に団体観光客はあまり歓迎されてはいなかったが、それでも彼らが落とす消費マネーで経済的に潤っていた人々にとつては、噂通りとなれば打撃が大きいことだろう。

ただ、ある研究者は冷静に「実は台湾政府は、中国による観光客差し止めは事前に予想しており、その対策は打っていた」と解説する。具体的には、団体観光客の入国をある程度制限していたというのだ。「中国政府も個人の観光までは制限できないだろう」という話もあり、また、大陸観光客が土産物を買う場所は、すでに中国人が投資した店になっているので、それほど影響はない、という意見もあった。

茶荘の主人の話を知ると、やはり「新政権には何の期待もない」と素っ気ない。ただ「我々が選んだのだから、責任は我々自身にある。そこが大陸とは違うんだ！」と強調していたのは、印象的だった。今回の総統選挙は、中国大陸とは距離を置く我々は彼らとは違うんだ、ということとを強く意識した選挙だったが、そこには自らの判断に対する自負と不安が交錯する。

「台湾にはこれまでもいろいろな困難が降り掛かってきたが、そのたびに何とかやってきたんだ。これからも何とかなるよ」という楽観論も聞かれるが、その一方で「自らの生活を維持しながら、大陸とうまく付き合うことは本当にできるのだろうか」と不安を口にする若者もいた。このあたりから、最近では「日本への期待」が高まっており、「日台の企業が連携して、新しいマーケットを開拓しよう」という声も何度か聞かれた。

ただ、当の日本企業にはその気があるのだろうか。そして「日台関係は一見良好に見えるが、実務レベルでのパイプは決して以前のように太くはない。相手をよく理解できないで、協力すると言ってもそれは実に難しい」と言った日本研究者の言葉が頭に残っている。



コラムニスト・アジアウォッチャー
須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。